

蒙古事

弘安二年八月六日 五八歳

御文はいそぎ御返事申すべく候ひつれども、たしかなるびんぎ候はで、いまゝで申し候はず。べんあざりがびんぎ、あまりそうそうにてかきあへず候ひき。さては各々としのころいかんがとをぼしつるもうこの事、すでにちかづきて候か。我が国のほろびん事はあさましけれども、これだにもそら事になるならば、日本国の人々いよいよ法華経を謗じて万人無間地獄に墮つべし。かれだにもつよるならば国はほろぶとも謗法はうすくなりなん。譬へば灸治をしてやまいをいやし、針治にて人をなをすがごとし。当時はなげくとも後は悦びなり。日蓮は法華経の御使ひ、日本国の人々は^{だいぞく}大族王の一閻浮提の仏法を失ひしがごとし。蒙古国は雪山の^{せつせん}下王のごとし。天の御使ひとして法華経の行者を^ぐあだむ人々を罰せらるゝか。又、現身に改悔ををこしてあるならば、阿闍世王の^{あじゃせおう}仏に歸して^{びやくらい}白癩を^ちやめ、^{いのち}四十年の^{いのち}寿をのべ、無根の信と申す位にのぼりて現身に無生忍を^得えたりしがごとし。恐々謹言。

八月六日

日蓮花押